

地域への提言と社会への提言 Proposals for Local Communities and Society

富樫 豊
Togashi Yutaka

NPO 地域における知識の結い、代表、工博
Colleague of knowledge、Chairman、Dr.Eng

要約

本稿は、地域への提言と社会への提言の二本立てとした。

(1)地域への提言； 著者は、2006 年以降、地域活性化に向けた提言を建設系に限らず社会一般について、学術的理屈よりも市民感覚で執筆してきた。これまでの各種提言のうち、諸問題を広く覆うようにいくつか選んで、ここに掲載する。

(2)社会への提言；従来よりいわれていることではあるが、街づくりと都市づくりは別物であり、街づくりの論理がそのまま都市づくりにスライドはできず、都市は都市として固有の論理があるとされている。本稿ではこれに異を唱えて、都市のロジックは街づくりのロジックと繋がっているとして街・都市のロジックを討した。すなわち本来、都市の足元は街であり、街のロジックが都市にも繋がっていると考えて、街づくり論理の都市へどう積み上げていくかを検討し、街から都市へ、都市から国へ、国から国際社会、の枠組みにも論をすすめた。なおここでいう社会は国をも含むものとした。

地域	社会	提言
Local communities	Society	Proposals

【0】まえがき

著者はこれまで地域を中心に地域論を諸問題毎に考究してきた。その後、国レベルの諸問題にも解決に向けて論を進めてきた。本稿では、上記二点について、提言を第 I 編として地域について、第 II 編として社会についてまとめることにした。

【I】地域への提言

1. はじめに

1.1 目的； 2005 年頃から地域活動に興味を持ち、地域活性化のための方策を日頃から考え、各種のレポートを作成し、そのうちのいくつかを折を見て発表していた。当初の 2000-2010 年代では目に付くところを自分流に市民感覚と称してきたものであるが、2020 年代に入ると、自分流の論理である社会基礎土壌の形成といった広がりのあるセクでさらに提言には磨きをかけることができた。ここに私論として、これまでの多数の提言を取りまとめることにした。

1.2 事の経緯； 富山県では、どの自治体とも同じように 2000 年以降、各種の専門委員会や審議会に公募委員として市民の参加を制度化させ、150 個ほどの委員会をも通じて、市民の声を行政に反映させている。これにあわせ公募市民委員選定の際に、各種委員会管轄の各種問題や展望等について委員応募者に 800-1000 字程のレポートを課している。これは、市民側にとっては市民からの提言・意見

書であり、行政にとってはパブリックコメントや公聴会とは違った形態での市民の声を聞いたことになっている。

著者は応募者レポートの効用を上記のように考え当該制度を活用して、2006 年以降、地域活性化への提言として多くの見解を行政側に伝えてきた。折角であるので今回の web 論文集に、特に大事な提言を私論としていくつかまとめて掲載とした。

1.3 過去の提案一覧； 2026~2025 年にて提案してきた項目を記す。ただし、6 桁数字は西暦と月、太字は本稿で全文紹介する項目である。

(1) 人間形成・育成

1) 子育て・子育て

子育て支援 0605、人間性と子育て 200907

子育て少子化対策 201207、**1 子どもが育つ街** 201703

2) 青少年、人間

青少年健全育成 201703、**2 青少年健全育成(続)** 202503、

3 生涯学習 202211

(2) 生活充実

1) 家庭、食育、男女参画

4 家庭での食育とコミュニティ 202510、食育について 201108

男女共同参画 200705、**5 男女参画社会実現へ** 202505

2) 福祉

高齢者と共に 201204、日常の意識 201207、

幸せの実現に向け 201610、

6 社会システムづくり前段階 202208

3) 消費者問題

消費者教育 200701、食の安全 201612、市民視点 202302、

7 消費者問題の根源対応 202501、消費者教育 200701

(3) 環境

1) 環境の保全

環境の保全と創造を市民 201207、地域にて 201611、

- 農環境 201108、**8 森林のくに** 202301、雪問題 201208、水環境 202210、**9 水循環の深い実感・鑑賞** 202511
- 2) 自然環境
自然環境保護と育成 200605、観光について 200811
- 3) 文化環境
文化材保護と文化育成 200603、文化材を身近に 200907、文化財保存と活用 201207、文化の香りの醸成 201603、雪の文化と誇り 200607、祭りの普及・啓発 200607、
- (4) 地域づくり
景観について 200705、**10 景観づくりに深みを** 202506、**11 農村環境** 202509、市民スポーツについて 200907、スポーツ 201109、**12 スポーツからの気風** 202507
- (5) 社会づくり、広域基礎活力充実
1) 社会全般(富山)
県総合政策 201611、**13 10年後の姿とその実現** 202501、公共事業 200705
- 2) 施設
地元大学 200701、文学館 201610、立山博物館 201912、美術館 200704、**14 水墨美術館を地域からの支援** 202509
- (6) 他
歯の健康 201912、動物愛護問題 201705

2. 提案各論

[1]. 子育て支援と少子化～子どもが育つ街 「子育て支援や少子化・人口減少対策として 子どもが育つ街をめざして」

概要；子育て支援や少子化対策には親世代を含めた大人の意識変革によるものが大きいと考え、子供が育つ街づくりとして大人の意識向上について検討すべき。

△ 子育て支援を含め少子化や人口減少の問題について、勤労の不安定さや実質低賃金などに端を発して日常生活の営みに魅力やゆとりが欠如ぎみとなり、子どもよりも大人の都合を優先させる風潮が蔓延しはじめ今日に至っているといえる。解決に向けては、社会全体の取り組みに加え地域社会(家庭を含む)での日常の営み改善を図ることとしたい。すなわち、子どもが育つ街づくりのために地域社会における親を含めた大人世代の意識改革を図りたいものである。

ここで具体的な話として晩婚化や未婚化をあげる。今、若者にとって結婚が魅力的ではなくなり、子どもと共に将来生活を展望することもおぼつかないといっても過言ではない。確かに若い人たちには「お金がたまってから結婚」「結婚そのものが自由からの拘束」「男には結婚は節目」「女は結婚よりも仕事での生きがい」などの思いがある。どれをとっても、働き方、経済状況、社会通念などに問題がある。これについて対処は社会全体もさることながら大人の意識改革をもって地域や家庭から取り組んでいきたい。

△ 具体的に二点述べる。

・まず人間関係の希薄化について：これは、どんな集団でも男女間においても当然進行しており、お互いの理解にはコミュニケーションが不足している。確かに今は人を介さずとも買い物や時には仕事すら可能になろうとし

ている。コミュニケーションの充実には何のためのものかを明確にすることからして、そうしたムード作りが必要といえよう。

・次に人間尊重について：地域や郷土に愛着をというスローガンの活動が各地盛んである。にもかかわらず愛着はいつも観光の次元で留まっており、人を愛して敬うといった次元までなかなか高揚していない。また各地の自然教室でも、自然界で一番好きなものの中に人間が入っていないことが気にかかる。ここは常に人間主体のムードを作るべきかと思う。

△ 以上まとめてみると、問題の解決には環境改善としての意識改革を含めて雰囲気づくりがあり、当事者同士の努力はもちろんのこと地域社会の後押しが必要といえる。そのためには大人は地域の子どもと共に居し、人の慈しみや楽しみといった意識を育むといった日常生活を意識して充実させることしかないと考え。これをもって環境の基礎的雰囲気の醸成としたい。

[2]. 青少年の健全育成について

私は、IT 技術時代の現在・近未来において、技術の恩恵が人間性(精神性)あつてのものとして、青少年健全育成には人間性がより一層問われると思っている。そうした考えのもと、青少年健全育成について具体的に述べたい。

(1) IT 技術とは今後どう向き合うのか；IT 技術が人間側になぜマイナスの様相を呈することもあるのか。原因は、個性や独創性が枠を超え許されずとか、多様性も異質排除圧力や同調圧力を超えれずとか、今の社会そのものにあるといえる。よって社会の健全さとして、自己や社会性の確立などが求められる。

(2) 青少年への期待をどうつくり上げるのか；次世代の主役となるだけに今世代の大人が青少年に託すのが期待である。青少年は世の中にこだわることを知らないだけに、恐れを知らないパワーを持つとともに、今世代が過去から受け継いだものには却って吟味し継承していく。となると、青少年の育成には、教育や活動環境整備はいうに及ばず、胸を貸すとか見守りといったことが今世代に求められている。しかしながら、この世の中、なかなか余裕があまり見られないだけに、余裕づくりに励むことこそが今世代の責務と思っている。

(3) 対話の場が日常的になれば；私は、個人個人が種々の問題を意識して、ひいては多様な幾つもの社会意識(言うなれば世論か)になればとの思いをもっている。これが「どこからどうやって」作り上げられるかといえば、(マスメディアの先導とは別に)個人個人がいろんな場で世相問題・人間問題を(討論もいいが)対話で積み重ねていくことかと思う。こういうと「そんなの当たり前」というのがこの時世であるが、そのあたり前を実直・愚直に進めることが肝要であり、そうしたところから各人が各専門の多様な場で反映させ、時には俯瞰した施策がつけられていこう。当たり前が一番難しいものといつも思っている。

(4) 結び；青少年の問題は大人の問題そのものであり、青少年世界のみでの対処だけではなく大人の社会全体を人間にやさしいモード(個人尊重)に作り替えていくべきと考える。

【3】生涯学習について

「社会意識形成の視点からの生涯学習について

～生涯学習振興に関する提言」

生涯学習は学習成果の社会への還元を含めた自分のための学習(自分磨き)として位置付けられ、その制度は社会の成熟に向けて大きく貢献している。私はそうした生涯学習についてより充実感の向上を図る一視点として学習の社会的意義の向上を目指したい。

なぜか。(独学と対比させて)学習に社会性が兼ね備われれば、自分自身の学習の総体的位置関係(自分の目指す学習の方向)が分かり、学習の面白さ(一人世界超えの実感による活力)がより増幅され頑張れると考えられるからである。これに加えて私は、学習成果の社会還元もさることながら社会をもっと個人ベースで積極的につくり上げていくという使命感が醸し出されるようにしたい。こう言う学習にはやはり立派な専門や教養が必要と思われるが、そうではなく生涯学習のノリによる自然体の参加でもって(市民には)使命感が湧き、社会への関わりが実感できると考える。

こうして、学習成果が社会との結びつきを強めれば、良識や見識といった社会意識が市民生活を支える社会素養となって市民にフィードバックされ、市民の思いが自ら実感されることになる。もちろん各界の専門家の尽力による社会意識の醸成とともに市民感覚を取り入れた社会意識により、市民はより自覚的となる。これをもって学習システムそのものに社会認識が盛り込まれたといえる。

具体的には、専門家の論理的なアプローチのところから市民感覚からの情熱的感性的アプローチによる学習成果が(レベル不問で)多層的に混在することにより社会的意味が生起し、生涯学習を介して地域コミュニティの充実や市民活力の向上へと効果が発揮されていくことになる。

では、生涯学習施策へはどう反映か。生涯学習を介した市民による社会づくりの方向性の下で市民や社会の多様性への対応の一つとして、国際域や県域はいうに及ばず市町村内の小域(任意の小勉強会他)までをも視野に入れることはまわりまわってコミュニティづくりにも繋がり、また市民活力醸成の視点を活かすことにもなる。こうした視点での生涯学習に大いに期待したい。

【4】家庭における食育とコミュニティ

「食は人を支え、社会を支える」といわれているように人の心身健康かつ生活営みの充実と幸福の達成源は食にありはいうまでもない。これを念頭に食を個人から社会まで概観すると、社会の富や英知による食の安定供給・多

様性・充実が評価されているが、社会の効率化・分断化の風潮が食に好ましからざる方向に現れていることが気になる。

例えば、「早く簡単に」の食事のもと、調理には「手間暇かけず」が先行し、食事をとるにも「さっさと食して団欒の軽視」である。こうしたことは、食が心身健康や社会への支えを霞ませざみであり、団欒のコミュニケーション不足が愛情の育み等に支障をきたし、ひいては社会において問題との指摘もある。

ここでは、社会を念頭に置き家庭というコミュニティにおいて食が果たす役割に着目し、食を介した健全なコミュニティづくり(食育)を目指して方策を列挙する。

△家庭のコミュニティの様相

- ・余裕づくり；過度の効率化ではなく、一見無駄のように見えることが人間には余裕として捉えられる。
- ・余裕は家庭から率先してつくる。(もちろん社会の制度的な支援(例えば働き方改革の続事業)は欲しい)
- ・コミュニティづくりは家庭から；家庭は社会実践の最初の場であり、社会性が培われていく。そこでは、コミュニケーションと共に互いに食を通した楽しみや慈しみ愛情が育まれ、セス育成、知の伝授へと繋がっていく。
- ・食の時間・空間は、料理の喜び、食べる喜び、両者の喜びがあり、家庭にて皆と共に楽しむことをもってコミュニティが形成といえる。
- ・分断について。社会の分断傾向は家庭にも入り込み、これが食の多様化として「好きな時に好きなものを」という個別行動改善には、家庭内に余裕が要である。

△食との接し方

- ・食物の素顔のもと、我らの食環境が彩られる。野菜果物でも多少不整形があるから、みじん切りとかカット何とかなではなく、やはり原形志向なら農への理解や生への理解が増すと考える。
- ・美味しさの提供として甘味化合物の添加や購買欲刺激といった世の中かまい過ぎが食の本来の味を損ねること多々であり。食の素顔の観点を通したい。

△家庭において、本来、健全さが当たり前として楽しむ風潮がつけられていくだけに、食育とはコミュニティづくりとしても尽力したい。

【5】男女共同参画社会の実現に向けて

△男女参画の各種の取り組みにより、社会や個人において女性の権意識の向上を含め成果は着実に積み上がっている。ここに「より一層」を求めるならば、地域や身の回りの場にも恩恵が波及して欲しいし、多くの方が運動に参加する場とチャンスにもっと恵まれて欲しい。目指す男女参画社会では大多数の支持はいうまでもないだけに、そうした方の疎遠に近い状態をどう改善していくかが問題であり、これについて私見を述べたい。

まず、大多数の方は何を思い行動しているのか。皆さんは何もしていないのではなく活動には疎遠なだけであ

り、実際には問題を把握し行動しておられる。二例を示す。

田舎では、昔からの風潮と相まって自ら格差是正に動かず(動けず)の感が見られ、却って女性はそうした風潮を敏感に感じているからこそ、都会での格差を承知の上で県外に脱出するのである。

ならば都会ではどうか。都会には自由があり、働き口がある。高望みしなければどうとでもなるので、男女格差には根底には認識がされていても、都会の便利の享受で一応の満足を得ていて、格差への不満よりもなれとあきらめが先行しているかのようにもみえる。

これより、皆さん問題を受け止めているものの行動に移す場合には置かれている現状(社会システム)より受ける影響がそれぞれ行動に現れたと解釈できる。

△そうであれば、一般の場にも改善の風が吹くようにしたい。風が吹くとは個人の頑張りが自然に醸成するような社会意識の形成のこと。こう考えると、男女参画も地域街づくりも根っこは一緒であり、働き方改革とともに住まい方や生活の仕方に改善も必要となる。

そうした場合に改善の力が沸き上がるようになるには、やはり社会と個人の相互の作用がわだかまりなく自由奔放であり、これがボトムアップとして社会に向けた活力になると考える。

これには街づくりが一番かと思う。理由は、生活が自分らの手で皆さんと共に日常的に改善を図れるなら、気張らずにごく普通の生活の延長として考えることができ、また何気ない語り合いでも語り合うこと自体が精神性の高揚に繋がると考えられる。

△まとめると、運動の基本はすべての方の活動参加とできるところから関わり合うことであり、男女参画活動を日頃の生活充実の延長として捉えることである。具体論はさておき、皆さんがそんな意識で生活を営むことこそが改善にむけた実践と考えている。

【6】福祉問題～社会システムづくりの前段階

「安心・幸せな暮らしの延長による社会福祉時代の地域社会づくり」

△ 県の福祉基本計画は、新時代の福祉政策施策として福祉を広く捉え、いわゆる人づくりからシステムづくりまで、環境整備や実践等を加えて構成されており、特に市民との協働ならびに安心・幸せ感に包まれる社会に向けての地域づくり構想も魅力的で大いに期待される。

そこで思うことがある。確かにすべての人の安心・幸せ感を供与できるという地域社会づくりに向けて、各種施策に関する市民の関わりや実働への道が開かれているが、(これが市民協働といわれるものの)いまひとつ市民の底力が発揮されるようにと考える。すなわち、市民と行政の役割分担という分化分業はこの世の当然のこととはいえ、何とか市民の社会への関わりに充実感が持てるようにすると考えるのである。人に着目していえば、触れ合

いや支え合いといった本来の人間行為が、(基本)生活圏における暮らしにおいてしっかりと培われるようにすることである。また、地域づくりについても、そうした暮らしの健全化が集積されたものともいえ、その意味では暮らしの延長に地域づくりがあるといえる。こうして、暮らしという学びや教えや育みや活力醸成等の蓄積により、市民の意識がつくれ、市民の活力が市民参画として磨き上げられていく。これらを大事にしたいものである。

△ ここでは市民参画のあり方、社会意識の形成、地域づくりの構想を以下に述べる。

(1) 市民参画。市民参画とは施策企画段階からの参画をいう。その本質は、市民と行政が共に勉強することをいう。もちろん、企画段階では学術やコンサルからの支援もあるので、その意味では官学産民の連携となることもあろう。全国では、神奈川県大和市や東京都の国立市がそうした連携で大きな成果を収めていた。

しかし、こうした取り組みは全国に広まらなかった。理由は、行政は行政でという考えのもと市民参画の本意に理解が得られなかったからであろう。だからこそ、民と官の両方にわだかまりない協調姿勢が今後は必要といえる。なお、市民参画では、市民参画の場が行政によってあらかじめ作られるのではなく、市民が市民参画の場をつくっていくことが求められている。

(2) 社会意識。もともと社会意識とは、世論とか社会常識とかいったことを指すが、ここでは社会における見識良識の事とする。もちろん社会意識は個人各位の社会に関する意識として見識良識が磨き上げられ、これらが集積して社会における識となる。「森と木の例」になぞらえれば、木の段階での(個々)意識が森という大きな段階での意識になり、かつ森の意識が(各々の)木の意識を成長させていく、ということになる。社会と個人との関係をこのように意識や参加として捉えて初めて、個人及び社会が健全化していくことになる。社会福祉はそうした意識がバックにあってこそ輝くと思っている。なお、社会意識はどこで育まれるかといえば、それは暮らしの中からであることを付記しておく。

(3) 地域づくり。地域づくりや街づくりの根幹は、いくつもの(基本)生活圏ごとにごく自然に営まれる暮らしが、街づくりの集積として社会を形成するといったことを背景にしている。街においては、人が往来し、話声で街が包まれるのであり、顔の見える街が地域の健全化、ひいては社会の健全化へと発展していくと考え、また暮らしを営むことは基本的人権そのものであるとも捉える。これにより、危険・不安、環境改悪、格差拡大等は人権問題そのものとして改善を図りたい。

△ 本稿では、成熟社会に向けた社会システムづくりを論じる前段階として、市民の素養を活かす取り組みが必要であると主張した。この観点での社会システムづくりならば社会システム運用も「すべての人のため」として円滑

となろう。これをもって、富山における富山人による土着な福祉社会(富山型共生社会)づくりに資すればと思う
しだいである。

【7】消費者問題の根源対応について対象域を広げ

消費者問題においては、具体的な諸問題への取り組みや消費者教育の取り組みが行われている。最近では、SDGsの一環で消費行動には環境や倫理に配慮すべきとしての取り組みも活発化している。しかしながら、確かに消費行動の範囲が広まったとはいえ、これで十分とは思えず、消費行動の社会的状況が十分議論されていないとみている。例えば物価高は依然、家計を苦しめており、不健全な生活を覚束なくさせているのでは。加えて将来の食糧難には以前にもまして危機感が増している。もちろん、消費行動として消費に関する社会的位置づけがグレードアップし、消費者教育も充実の方向にはあるが、今少し事の本質に立ち入る事が必要と考える。

そんな状況下にて私が問題にしたいのは「物価高」と「作る責任の不十分さ」であり、これらについて根源志向の敬遠が大変気にかかる。消費者問題では「市民一人一人の意識向上を」と声高であるが、本当に高めるのは社会意識である。にもかかわらず、根源への立ち入り難さが今の消費者問題のように見え、結果的に消費側は作る側と社会とを一線を画さざるを得ないのであろう。もちろん、原因は市民の根源的な声が社会に反映されにくいからである。

ではどうするのか。消費行動には、エカ消費が謳うような倫理や環境への配慮が始まっている。これに弾みをつけて今後は、市民生活を通して倫理や環境を市民がつくるようになり、消費者問題で例えば詐欺や危険食品などの問題には消費者問題を基礎にして人権問題へと勢いが増せばと思っている。

また社会に対しては、多忙な時代にはお任せ主義や単路思考に走りがちという現実対応が個人レベルに根を下ろしている。だから、消費者問題の範疇では物価高を招いた円安政策の政府責任が問われにくく、また作る責任の不十分さには社会がそもそも容認しているかのようであり、例えば農薬漬けの農作物が市場に出回っても何の改善もされ難いのであろう。すなわち、消費者問題を消費行動のみに特化したことが問題を狭くし、問題の本質を霞ませていよう。

以上のように見ると、市民の消費行動に関する問題は消費者問題を基本に、市民の生活をどう守るかという問題、すなわち人権の問題へと枠を広げる必要がある。そう考えることにより消費者の枠を超え生活者としての捉え方でもって、市民生活を通して倫理や環境をつくり、社会意識をつくっていくことになるといえよう。

【8】富山まるごと森林のくに

我ら風土づくりは富山まるごと森林のくにへ

県民こぞって支持する森林づくりについて、富山県らしい富山県民らしいあり方とは何であろうか。それは富山県の歴史風土に根差した県民と自然とのふれあいそのものではなからうか。もしかすると、我らも気いていないことかもしれない。となると、ここに論議をとおして、素晴らしきふれあい観にもとづいて森林づくりを構築するというにしたい。

そのためには、富山県の自然的特徴としての生態系と地形特徴の特徴に対して、我らの森林観がどうなっているのか。3000m級の山々をバックに奥山、里山、里、里海といった生態系・生活風土系の区分に照らすと、いろいろな顔を持つことが分かる。我らの森林観は、どちらかといえば、立山をバックにした山々のものである。しかし、平野部における、森林は山岳の森林とも一体であり、その意味では富山県全体がまるごと森林の国といっても差し支えない。

あれ、平野は森でなく散在林ではないのか、と言った声が出そうではあるが、そうではなく、散在林として、風景的にもあたかもネットワークでつながっているのである。ここが富山らしい誇れる点である。これが、あまりにも素晴らしいので、日常的に当り前感が強く、さほど意識しないとといったのが現状である。

少し前置きが長くなったが、風土に照らしても素晴らしいといった恩恵を我らは気持ちの上で受けているのである、これが当り前として満喫できれば素晴らしいことである。こうした精神的効用の効果はどこに現れるのか。自然を大事にするこう思考と行動に現れるのである。森林づくりといえば、植林による森林維持は当然のこと、観光資源としての利活用ももちろん大事だが、何よりも県民に愛されることが一番かと。そうなると、自然と、森林に対し、応援をしたくなるのである。山を守る方々への支援、観光への支援、治山治水への支援、さらに農耕への支援、ということになり、それこそ、植林とまではいなくても庭や家庭菜園、水田の小脇に樹木を草本と共に植えることまた誰でもが県民を奮い立たせる行為となる。

森林づくりとはまさにそのことから出発するといった展開が、富山らしさにつながると考える。こうして、富山まるごと、水の国、米の国、森の国、茶間と海の国として、我らの生活が充実するものといえる、

【9】とやま 21 世紀水ビジョン

～水循環のより深い実感・鑑賞による生活充実を目指し

水に関する諸問題について互いに関連しあうだけに、水循環系は積極的扱われ、何よりも市民の理解が環境改善や文化へと広まっている。市民にとっては、生業や洪水対策・利水についての人工物を介した市民生活、またそれによる自然と人間との風景・風土にも関わるとならば、生活にはより充実さを求めよう。

ではどうする。我らは身の回りをベースに個々につくら

れるコミュニティを互いに関連させて生活圏を拡大している。私は、生活圏拡大には水循環を核にした自然と生活営みをリンクさせ生活充実を考える。

そこで、水循環に着目し市民生活の充実をどう図るか。これには、水を介して市民が繋がること、水循環を全体的に俯瞰すること、各自の置かれている水との交わりを深めることが基本である。要は生活を水循環という脈絡でゆるぎない大きな生活総体としたいものである。これにより、人間がより自然と幅広く自然と共生とか自然と隣り合わせの居住という感覚がより磨きがかかり、愛や敬いや慈しみ等の感性が総体としての「生」に充実を与えるといえる。

こうした考えを基に市民側における循環系への対処として、環境体験の積み重ねと人工環境への反映と市民への醸成の三点に絞ってみた。

(1) 環境体験；生活充実には環境体験が必要。周りの環境に水循環のモードが形となって、あるいは世論(社会的環境)となっていることが環境体験の蓄積へと繋がっていく。その意味では環境づくりが市民に環境効果を享受しているともいえる。それには勿論、ひたむきな環境教育、今まさに環境に配慮した工学や農学などとの協働となる。なおイメージとしては、芸術の都なら、芸術的都市空間が市民に芸術を醸し出している。

(2) 人工環境；集落や都市といった環境における水の恩恵や水に関する保全には、効率と防御が重要因子である。(生産)効率には、環境に配慮して自然体系で下で考えるいわば環境効率を考えたい。また防御には、耐震であれば免震・制震といったように、治山は森林の保有力に期待し、治水は流れに抗するのではなく免・制に期待したい。

(3) 自然へのアクセス；霧・降雨・降雪あれば晴天もあり。こうした二極が循環系の存在がより身近に感じさせ、さらに生物界の様相を含め、種々の思いが開花する。こう考えて、自然環境がより一層の認識へと繋げたい。

【10】 富山らしい景観づくりのために必要なこと

～深みのある景観をめざして

富山だからこそ種々の視点が可能かと思ひ景観づくりの多様な展開を望みたい。

景観は文化・歴史に加え生活の営みを反映しているだけに景観と街(コミュニティ)との緊密一体化が新たな段階としてめざされている。

しかしながら、景観に関する市民参加や市民生活への寄与に加え、市民の景観への思い入れも依然として気になる。

今必要なのは、行政と市民の各立場の相互尊重に基づいて市民側からの景観への関与と景観からの市民生活への寄与であり、景観への理念的思い入れである。

ここでは、景観の充実に向け市民側からの景観とコミュニティの関連を図るべく市民生活の視点から望ましい姿を概観し各課題を検討する。

△視点； 生活の営み・環境の視点

景観や街に関する構成要素として生活営みと環境に着目して足元感覚の視点を以下に記す。

- ・居住含めた生活営みの積み上げと感覚・思考
- ・身近な生活場「個」と個々で形成の「全体」
- ・「景観」と「コミュニティ」の相互作用と見え方

△感覚的概念； 市民側からの景観概念

景観が市民側になぜ縁遠い概念か。市民の勉強不足にあらず。市民生活の積み上げとして景観がつくられていないだけのこと。市民側からは生活空間に見えるもの「景観」と見えないもの「街(コミュニティ、人間環境)」を組み合わせ、求められる景観とは生活の積み上げが概念化されたものである。

△感覚的全体像； 生活視点から個々と全体の二重構成

街づくりや景観づくりを県内各地で実施し思うに両者には複合的な繋がりが見えにくい。そもそも個々の活動が全体を構成し、また全体から個々へと繋がる。このような関りをもって「個と全体」の全体像となる。

△足元から展望；

生活視点に基づくコミュニティからの景観

身近な生活の営みを基本にしてコミュニティが形成され、外向きを意識すれば景観が認識される。外向きでは見え方の二重性が互いに相補しあい、景観には形あり、コミュニティにはオーラありとすれば両者を二重極として一体化したことになり、見えないオーラが見えるものを包むことにより奥深さが備わる。

△足元から感覚思考；

コミュニティと景観とを包む人間活動の背景の理念理想

生活の営みには景観を造ることもあれば景観からの作用を受けることもある。これはコミュニティの縁を越えても関わる人にもあてはまる。

こうした相互作用で人間側に培われるものが社会の基礎的な意識・行動の源となる英知や思考であり、これは生活感性からの蓄積となるいわば社会的基礎教養といえ景観へは理念理想として現れる。

△足元から作り上げ； コミュニティから拡散するその神髄

人間創作行動の幹は市民生活の営み実践そのもの。そこから人それぞれに始まる行動や人との繋がりによりコミュニティづくりが始動・定着し、社会的基礎教養が気品を生みだしている。

こうした成長するコミュニティに必要な体験積み上げの要件を以下に記す。

- ・個々と全体で多岐多様な実践
- ・地域における(語り合いの場とチャットの基で)交流
- ・住民の息遣いが植生に反映(基礎景観)、等

△感覚的生活充実；

コミュニティや景観からの市民への生活充実

市民にはコミュニティづくりとして環境やネットワークの充実とともに積み上げによる恩恵享受もあり、そうした様相が景観には深みとして現れる。

【11】農村のより良い充実を目指して～足元からのコミュニティ

農業問題の枠組みとして、国の成長路線には第一次産業を外した基幹産業の推進とそれに対応して農村コミュニティ疲弊・農業人意欲減退を伴う社会のシステム化が進行するといった二段階で捉えたい。第一段階は政治・経済の範疇（関係各位にお任せ）であり、第二段階が我らの直近・足元であるコミュニティづくりと人間づくりの範疇である。

私は、改善には第二段階からのアプローチとして、コミュニティの健全化を目指し、住みやすくやりがいある農村づくりについて、外的支援を可能にし、農業支援は一般市民の次元を基礎に市民への協力をより求めることにしたい。さすれば第一段階への足元からの醸成にも繋がろう。

本稿では、上記の考えにより市民との距離感をより縮めること、農をもっと日常的な環境とすることを論じる。なお文中、市民配慮として農業を農と略記する。

(1) 住みよく充実した農村づくり

足元からとしてコミュニティづくりがある。これには、社会における多忙さを軽減する余裕を足元からの実践でつくること、食による団欒・コミュニケーションに始まり、感性・思考・行動へと積み上げれば、社会には好循環に繋がると考える。社会次元の話となると本来は国あげての施策だが、地方自治体でも限らない支援の姿勢が必ず農村にも及び、足元から勤めて実践が例え僅かであっても、その一歩が先に繋がるものである。そうすれば、本物志向・自然志向が健全化し、人が集まり、原風景も含め活気づいてこよう。

もちろん、種々補助金という財政支援も重要だが、元氣なコミュニティによる精神的背景を皆さん共有したいものである。こうした見えない外的支柱が農村にあれば、農村イバとして営農組織強化に加え地元中心の企業系へと発展もあると考える。

(2) 街にも農村の思い入れ持ち込み

生活空間にいろんな思いを込めることが必要。農村の風景が都市部にでも若干延長として農の思い入れを持ち込むことを望む。例えば、環境整備として沿道の花壇や街路樹と同じように農に関する思い入れがあろう。都市に農園とはいわないまでも、道や広場に面した一角で仮設でもいいから設けることとして、花壇ならぬ農作物壇の感覚があってもいい。「市民には農を卑近い感じることで、農への強力な支援に繋がっていくもとなるかと思う。

【12】 県民や子どもがこぞってスポーツを楽しむとは ～スポーツからの気風が県域の基礎活力に

私事から。学校時代ではスポーツは苦手であり、運動会もいつも大変と思っていたが、ならば運動が嫌いかといえそうではなく、ワアワアと楽しんでいた。それだからこそ、スポーツで体を動かすことの理が体で受け入れていたように思っている。

学校時代を過ぎ大学時代になると、学校時代の諸体験が随所に現れてくるから不思議である。とくに、見るスポーツを含め、身心鍛錬でなくても、ああこれがスポーツ愛好かと思う次第であった。

そんなとき、スポーツを県民で楽しみ、スポーツをさりげなく人格形成にもかかわってくるということで、行政を始めスポーツ界がよりスポーツの親和性を求めておられるのを見るにつけ、いやいや個人レベルでは皆さんスポーツとの親和性は生活の中に溶け込んでいるといいたい。ならば、ことさらスポーツをと掛け声が必要なのはなぜであろうか。むしろそうした観点から切り込んでみたい。

私事にもあるように、各人すぐくスポーツ理解はあるものの、それが個人の領域でとどまっていた、互いに結びつきが弱く大きな力になっていないとみるべきと思う。実はこのことがスポーツだけの問題ではなくすべてに関わってしよう。逆に言うと、スポーツを通した盛り上がり県民を動かし、これが他の問題に対しても先駆的に影響を与えるといえる。だからこそ、スポーツが各人の人格や意欲や心意気までも動かす原動力になるといいたい。

確かに、そうした効用までも持つスポーツは強力である。こうした所の観念を持てば、自然とスポーツが賑やかになり、かつスポーツのオーラーも各人の心にもしかりと響くといえる。こうしたオーラーが、各自地域のコミュニティを育て、また県域の活性化を支えるスポーツからの気風を作り上げているといっても過言ではない。

「あれっ、何だそれだけ」という見方もあるが、こうした観念を持って体を動かし、より県民への活力醸成へと繋がるなら、これほど心強いことこの上なしではないだろうかと思う次第である。畳みかければ、学校現場でのスポーツ、アスリート育成も、そうした県民の意識醸成の基、いや気風の基、華が開くといいたい。

【13】 10年後の富山県が目指すべき姿と

その実現のために ～人間育成の取り組み

△はじめに

10年先の富山のあるべき姿についてはバックキャストアプローチによるプロジェクトスタイルと地道スタイルとを両輪に前者を支援する後者として人間育成が必要であると考える。

△人間の育成

人間を育成するには教育のシステム整備の前に社会と人間との相互関係性そのものが人間活動と人間育成を共になせることに着目すべきである。以下に人間育成の個人と社会の関係性を列挙する。

a. ウェルビーイング概念を個人から社会へと次元拡大

今は個人レベルのウェルビーイングが社会のウェルビーイングあつてのものとする段階にきている。社会レベルと個人レベルとの相対関係がシカして社会の一層の充実が図られる。

b. 持続可能性を超えて世代間(連続)継承発展

人間は世代間連続性でもってバトリー^①の如く人類遺産を継承発展させていく。各世代では世代内にて10年程のスパンで連続的代謝が図られ、新世代には役割交代を通して人間社会が新陳代謝する。

c. 足元からの市民行動が問題本質に接近

世の中の種々の問題は、国、自治体、企業、等の取り組みもさることながら、街バルや個人バルからの動きも大きな力と発揮している。そこでは個人の問題として自ら日常のかつ身近に動くことにより取り組みが自分事となっている。

d. 社会感性の各種環境下での形成

「人間は環境をつくり、環境は人間を育てる」といわれるように人間と環境の相互関係性から人間の感性が磨かれ、社会の感性へと発展していく。

e. 生活の営みは個人と社会との繋ぎ

生活の営みとして人間交流や人間活動等についてコミュニティを介し個人バル事象が社会へ積み上げられ、また社会から個人バルへの働きかけが基礎素養の育みとなり感性・理性や基礎力が醸成されよう。

f. 便利さ(技術)と人間性とのバランス

DX等テクノロジーは個人生活や社会における効率化を図る上でも今後さらに進展するだけに、足元の地域・人間の範疇から自然環境や地域環境を背景に地域思考が要と考える。また、テクノロジーに関してはまずは足元の地域環境において人手テカ(ヒューマンテカ)がイテカとバランスさせるようにする。

△人間育成の社会での展開

人間の育成考を如何に展開するか。方法は、社会の意識化に向けて、市民・社会ともに日常活動(例えばコミュニティのコミュニティ)を通していわば基礎体力形成を目指す。

【14】「魅力ある美術館にするために」、

地域・県域からの美術館支援ムードづくりを目指し

△ 魅力ある美術館とはについて、美術館側も含め多くの方々によるこれまでの施策と重複しないように、市民の感性を磨く拠点になること、と思っている。

そこで、市民の行動が社会的視野と空間的視野に広げるといふいわゆる枠外思考でもって、美術(芸術と以降記す)の果たす役割を捉えることにより、水墨美術館を盛り上げる市民からのムード造りに貢献することにしたい。以下検討する。

△(1) 社会的時間軸の思考；

人は感性と理性で動くといわれており、この世の中、理性中心の物質文化が高度な技術が感性をも引っ張っていくかのような勢いである。果たしてそうか。技術が先行するのではなく感性と技術との連携もあってもいいと思っていたところ、科学技術の方向性や妥当性には人文・社会・芸術が必要といわれており、芸術や人文などが社会人間活動における感性の育みに向けて一層期待されるようになってきている。

(2) 空間的思考；

富山では、海・平野・山が一体となっているというコンパクト感があるので、より一層の自然観と生活感が奏でるセンス(芸術観、芸術感)が潜在的にあるといえる。こうした考えで県は20年程前に「富山まるごと博物館・美術館」の構想を推し進めたこともある。

私はこの考えをより深めるために富山のコンパクト性を富山の自然環境と社会環境の両環境のリンクとして、人間生活の営みとを重ねてみる。これらを大きな意味での人間環境(仮称)として感性をより磨き上げていけば、自然環境からの感性の育成として成果が人間環境に蓄積されることになろう。

(3) 地域的情念的思考；感性展開の面から

市民の感性を各種環境が育むとはいえ、市民側にとっては当然のことながら市民の卑近かつ広がりという地域があり、核となる諸施設の存在がある。これは地域の内部にて、核を介して芸術のオーラが核から発せられ、市民がそのオーラに応え生活の営みに取り込んでいくことになる。そうならば、富山らしい展開として、富山の感性や文化性や居住といったこと、即ち富山での生活の営みが芸術を現在をとして過去・現在・未来を歴史的に造っていくことが可能となる。

(4) 世代で受け継ぎ思考；子どもへの啓発として

子ども向けに特化した事業の必要性もあるが、ここでは親子で芸術に親しむべしとする。これは、大人が子どもを連れて鑑賞するそんな行為が大人から子どもにも引き継がれていることに着目したい。子どもという子どもと目線に立つことは当然にしても、大人の視線もあっての子ども視線があることをも親子で共有していくべきである。

(5) 教育；

教育と言えば、芸術教育の存在はいうまでもないが、ここでいう生活の営みの充実というものが感性育成に繋がっていると、また学力向上という縦軸に対し感性という土台作りなる横軸の広がりが必要と考える。そうした教育を抜本的に行うという基礎土台教育の推進が種々の関係各位からの支援とあいまれば、各種事象が基礎土台に自然に積み上がっていくことになろう。

△まとめ；

魅力ある美術館とは、市民の感性を磨く拠点になることであり、地域・県域からの支援ムードづくりそのものである。そこにおいては、市民の感性を富山の自然環境や地域気質によるものに加えて、県文化行政・教育行政からの支援が感性の育む場づくりや感性教育の実践(学校教育の場でも感性教育を実施)と繋がれば、文化・教養ムードの醸成が可能となると考え、またこうした社会的風潮を受けて、拠点の役割は地域県域に日常に広がればと思う。そのためにも、拠点から県行政中枢への働きかけが啓発という様相として可能となればと思う。これによって、美術館が来場者を中心とした市民の方々はいかに及ばず、

地域・県の芸術ムードが一層の応援という形で美術館に
関与すると思える。なお、本稿の考えは、毛色の変わつ
たひとつのアプローチであることを断っておく。

▲追加；県では富山 10 年後の未来共創ビジョンを基に立案
中の総合計画において、県域全体に教育を介した文化・教
養の世論の形成が加わるならば、各種の施設はより活気
づくと思える。そう願いたいものである。

3. おわりに

富山において、機会あるごとに地域提言をここ 20 数年
行っている。提言に際しては基本姿勢として、地域にお
ける喫緊の課題とともに、課題の背景を俯瞰的・哲学的
等に照らして課題に対応することに努めた。

しかしながら、提言を受ける側においては、基本的
には喫緊課題に関しての施策づくりとその遂行に役立
つことが期待されているので、課題の背景にはあまり
立ち入らない、とされている。

それでも、提案側の意を貫くことには、近未来的に
も必要と考え、俯瞰的・哲学的等をもとに提言をし続け
ている。

【Ⅱ】 社会への提言

1. はじめに

1.1 目的； 街づくりの推進にむけ「専門家と市民のあり
方」について研究を進めてきた。そこでは、世の中の
種問題が身近な問題として街づくりに現れ、街づくりは
結局のところ、足元からの諸問題解決への実践ともいう
ことができる。しかも、そこからの実践においては、街
のスケールから都市のスケールへと拡大させ、いわば足元から上
位を展望することもできる。すなわち、都市問題もまた
そうした実践から積み上げられるのである。また、この考
えは、街から都市へ、都市から国へ、国から国際社会、
といったようにカテゴリの拡大におけるロジックの積み上げと
共に、種々のカテゴリにおける問題を俯瞰的に論究すること
ができる。

ここでは、社会の階層構造にて、足元から上位に向か
うロジックならびに上位のロジックとの関係性を検討すること
により、階層構造における各階層のロジックを足元のものから
積み上げる方法を考えることにして基礎論を作るとした。また、
具体的な例として、国家をも扱った。さらに、
社会の抱える問題のいくつかとして、高齢者問題をも扱
った。

1.2 経緯； 本研究の経緯について若干述べる、もともと
2020 年頃から進めていた「市民と専門家」の問題を突き詰
めていけば、市民の扱いが階層構造と共に多様な様相に
なり、これに対応して専門家も多様な存在となる。こう
した考えで街づくりや都市づくりを展開していたところ
に、2025 年からは SDGs 問題を通して国家や国際社会をも

問題にするようになり、勢い、社会の階層性に関心を持
って研究していた次第である。

そこで、今回の機会を基に着手段階における論文を作
成した次第である。

1.3 提案一覧

提案は社会、国、国際社会(平和)、国内問題(行政、高
齢者、SDGs)の 4 種に大別し、それぞれは以下のような
ものとする。

(1) 社会づくり

1. 街づくりは足元からの社会づくり 2025. 12. 29
2. ウェルビーイングは社会の幸福をも目指すべき、2025. 12. 31
3. 階層性社会における市民感覚と社会論理との併存 2025

(2) 国

4. 国のアジェンダ行い〜その社会的位置づけ、2025. 11. 25
5. アジェンダ行いの様相と本質、2025. 11. 26
6. 倫理には国民レベルと国レベルとで乖離あり、25. 11. 27
7. 街レベルの倫理を国レベルの倫理と併存させるには 20251128

(3) 国際社会

8. 平和推進には倫理の面からも、2025. 11. 24
9. 平和問題のベースづくりとして、2025. 12. 09

(4) 行政

10. 街づくり概説、最近行政と市民の間にコンサル 2025. 12. 17
11. 行政向け各種業務遂行にはコンサルの間に市民を、2025. 12. 20

(5) 高齢者問題

12. 高齢者の生存に関する脆弱な気質の問題 2025. 11. 29
13. 人は誰のための生きるのか、2025. 11. 30

(6) SDGs

14. SDGs 運動にいまなお盛り上がり、2025. 12. 10
15. SDGs 運動の背後をも念頭に置くと、2025. 12. 12

(7) 哲学的アプローチ

16. 街づくりから上位系へのロジックの積み上げ；第 I 編 10. 11. と同じ
17. 社会における存在と無の構成と存在系の階層構造 2025. 12

2. 提言各論

【1】 街づくりは足元からの社会づくりそのもの、

最近思うことがある。街づくりと都市づくりは同じく
人間居住環境のシステムづくりであるにもかかわらず、
両者はまるっきり別物とされている。例を挙げれば、
再開発においては、都市づくりとしては経済効率を勘案
したものであり、そこには住民サイドの声はほとんど聞
かないのが通例となっている。

これに対して、街づくりは、住民の生活空間を皆さん
で作るのであるから、都市づくりについても同じように
やるべしという要求は当たり前である。しかしながら、
これについては都市づくりにおいては経済効率や経済収
益性を考えると街づくり系は明らかにマイナスと判断し
ている。よって、街づくりと都市づくりが相いれること
はないといわれるのである。

このような経緯を今少し考えてみると、街の次元の論
理をもって都市の次元の論理にならないことは、都市運
営の論理が都市に入り込むからである。とはいえ、都市

もシロに見れば街の集積であるので、都市の論理といえども街の論理あつてのものといつてもいい。ならば二つの論理のそのすり合わせということになる。よつて、街づくりは何かにつけて街づくりがベースになるはず。すなわち、都市問題は、都市だけでは解決せず、いったん街バルまで問題を戻して、街の論理で対応していくことがいいはずである。今後はこうしたことをもっと研究していきたいものである。

〔2〕 ウェルビーイングは個人の幸福の範疇を超えて

社会の幸福をも目指すべき

人はなぜ生きる、どのすると幸せかといった幸福論がこれまで追及されてきた。最近、レベルを高めて、幸せは個人や社会そのものをも含めて、幸せ状態をウェルビーイングとして追及するようになってきた。

しかしながら、これはムード的に理解されても、何のためという深掘り論議されなくなつてきている。特に問題なのは、ウェルビーイングを個人の幸せから社会にまでと言つている割には、社会における幸せの追求がまるでないことである。ウェルビーイングの推進側の談では、個人の幸せを社会をバックにして形成するということであり、社会そのものは扱わないといった状態に満足されているかのようである。こうなると、人間を苦しめている種々の社会現象、例えば公害、再開発、自然破壊、紛争、戦争は対象外ということである。

社会の幸福追求を目指さずして社会をバックにした人間の幸せがあるのか、幸せは人間と社会とを一体として人間のありようを考えるべきなのである。その意味でも、ウェルビーイングは単にその場限りのムードをさも価値あるように見せかけているだけといわれても仕方がないのではなからうか。もしそんなムードなウェルビーイングを評価すべきことがあるとすると、そればウェルビーイングをまず考えることの習慣化に一役買ったということであろう。今後のウェルビーイングについて、社会幸福追求を旗印に追求していくべきである。

〔3〕 階層性社会における市民レベルと社会推進側のロジック

本市民感覚と社会運営論理との併存を目指して

近年、社会においては、程度の差こそあれ市民参加が謳われ、行政主導のパブコメや市民会議をはじめ産官学民の連携が盛んとなっている。そこでは市民の声が届く(聞いてもらう)だけではなく、市民との協働・共同・連携が図られている。

しかしながら、実際には市民参加は未だ道遠く、主体者・主導者となる官・産・学と肩を並べるレベルにはない。こうした状況下では、社会推進側にはそもそも市民存在が主体的に捉えられていないこともあつて、社会運営の構成システムにも未だ反映できていないばかりでなく、社会の良識見識には市民側からの想いが入りにくくもなつている。

では市民側からも社会運営とかかわりを持つにはどう

すべきか。これには、市民対社会の枠組みにおいて、市民が社会運営側に思いを託すだけではなく今一つ踏み込み込み、社会の考えを市民側からも作り上げ、これを市民論理として社会システム運営の論理に併存させてはどうか。またこれをもって社会意識に市民感覚を反映させて、それこそ社会的基礎土壌(社会を構成する人間の思考・行動の総体)としてはどうか。

ここではそのような市民側ビジョンを提唱し、市民論理並びに社会基礎土壌のあるべき姿を概観し、そのための市民コミュニティの様相を明確にしたい。

まず足元社会に着目する。市民の基礎行為としてはセンス(感性)と親和性(コミュニティ力)があり、これらはコミュニティにおける生活実践を通して生活環境・人間環境において作り上げられている。

センスについては、常時蓄積されるものでセンスからの思考・行動へと繋がつていき、市民流の哲学的・社会学的水準まで湧き上がつていく。

親和力については、人的関係性におけるセンスと捉えられ、身の回り・街の次元から社会へと広がつていく。その際に湧き出る力としてセンスが備わつていく。

次に、足元からの実践に着目する。足元における街づくりとコミュニケーション場づくりが市民のエネルギーを沸き上がらせ、社会にはボトムアップの流れをつくり、これが街から都市や社会へと市民の思いが通ることになる。

このように足元における生活実践を通して営みの根幹が深化し、市民感性が思考へと質的向上を促し、活力の源ともなる。これらが市民論理や社会的基礎土壌に繋がつていく。

本思考の効用としては、市民の生活実践が社会的基礎土壌づくりで結実し、市民の誇りへとつながり、社会諸問題はもちろん不条理問題に対しても、併存する市民論理や社会的基礎土壌からの沸き上がる力に期待が持てると考える。

以上をもって、市民感性からの社会づくり構想の試案とする。なお、本稿討論の関係各位に謝意を表する。

〔4〕 国のアイデンティティ~その社会的位置づけ

国のアイデンティティは、2010年頃にはポシカルアイデンティティ(以後アイデンティティ)の概念として生まれた。これは国際社会に対しての客観的評価を得るために設定されているものの、自国内にて国民のアイデンティティを尊重したものとはなっていない。というのも国家が国民と国家の枠組み(システム)から成るので、これを維持することが国民に向けた国の示すアイデンティティとなり、そこには自国民の声は基本はいらないことになる。(入るという意見もあるが、国民国家では国民の上に国家があるので、国民の声が反映というよりも国民の声を押さえてシステムを機能させるとみる方が多数派でなからうか。もちろんシステムに国民の声をどうしていくかが問われているが)。

次に、アイデンティティの効用を見よう。アイデンティティの社会性の社会は国際社会となるだけに、国(存在性とガバナンス)の正統性と合理性を歴史・文化・文明・言語、さらに自国民の民族性に求めることになり、自国民の多様性はある一定の枠内にとどまることが求められている。その路線でアイデンティティとして位置付けられており、そこには正統性と優位性が必要となっている。これが時には自国民のアイデンティティとなることもあれば、他国・他国民への蔑視・軽蔑にもつながることにもなる。それだけに国民の次元からも国際共調の視点が育まれるべきと考える。国は、そこまですることにより初めてアイデンティティを通して、国際社会における気品と人格ならぬ国格が育まれていくと考える。

【5】アイデンティティの様相と本質

アイデンティティという言葉は個人の存在や地域の在り方を問うものから、県や国まで領域を広げた次元のものまで、問われるようになってきている。そこでは、アイデンティティとは何か、アイデンティティを如何に造るかといったことが今まさに論じられてるところである。これについて考える。

△まずはどうして今の時期にアイデンティティが叫ばれるようになったのか、その経緯から掘り起こすことにする。

(1) 個人次元から；アイデンティティと言われる以前には、個人の次元では自主性・自律性、個性、といった言葉で個人の諸素養を表現していたが、こうした素養はいかにも直感的であるので、対社会に向けての不十分な客観性を何とか形にしようとして、心理学用語であるアイデンティティを使いだした。これにより、個人のこれまでの素養がアイデンティティとしてグレードアップされたことになる。とはいっても素養が形を変えたのではなく、社会も個人の素養を客観として見直しているといった方が合理と考えている。

(2) 地域においては、主に地域おこしや観光地のイメージ戦略としてグレードアップを図るために、社会からの認知といったお墨付きとしてアイデンティティという言葉に頼るようになった。これまた個人次元のものと同じように社会における客観的評価を手にしたともいえる。

(3) このように我らの足元から順にアイデンティティの概念化が進むと、当然ながら市町村や県においても何らかなる対応が迫られてくる。とはいえ、行政は住民サービスの在り方を踏まえて施策づくりや施策遂行を担うので、社会の一翼を担っているという行政の自負がアイデンティティを退けていたように思える。しかしながら、行政の何年計画とか理念をいいたすようになると、行政と言えどもアイデンティティの概念導入はすこぶる積極的意味を持ち、住民への理解が得られると考えだしてから、アイデンティティを強調することなく、アイデンティティ概念の恩恵を受けるようになったといってもいいであろう。

(4) 国レベルになるとどうか。2010年頃からグローバルアイデンティティ(以後アイデンティティ)の概念が生まれ、これまでは国の方針にアイデンティティ不要が突如として要となり、国の構成要素となる領域(領土、領空、領海、陸水、大気)、国民、主

権に加え言語・文化・歴史さらに文明をも織り交ぜて、アイデンティティを標榜してきている。

そしてまた、国が自国社会を構成しているとして、国内向けとして社会的客観性が備わっているという解釈が成立するとしている。しかしながら、ここに、国際的という視点があれば、国を超えた社会は国際社会であり、その意味でも、国にはオリジナリティに近い意味でアイデンティティを主張するようなる。

△次に考えるのは、アイデンティティの効用。先と同じように個人、地域、県・国といった順で見よう。

(1) 個人の場合、2010年代までは個人と社会という枠組みでは、社会的客観性を個人に与えたという図式でいえば、逆に個人が社会に関与したこと、社会づくりとしての働きが生じてくる。これが大きな特徴であり、これまであまり扱われてこなかったといえる。

(2) 地域においても個人レベルと同様に地域が個人からの想いの集積を行うとともに、地域からの社会づくりが形づくられよう。

(3) 市町村や県では；行政が市民、地域、といったところからの作用があり、またその逆からの作用もありとして、これまで以上に社会の存在が種々のところで意識化されるともいえる。

(4) 国レベルではどうかというと、国内では国と国民の関係性が法や規範で秩序化されており、国民の国への作用に対して、国からの国民への作用は体制内規則に基づいたものとなる。実はこれが地方自治に関してかなりの制約を課すことにもつながることは周知の事実である。なお国家については国家の気品という観点での論が1990年であったこともその後のアイデンティティづくりの一契機になったことはいうまでもない。

一方、国には国際社会との関係性をどう設定していくかが問われており、そこには、国際的次元での利害関係が先行し、協調関係を築くことがなかなか難しく、例え出来たとしてもそれは世界グローバル化のもとで可能となるだけである。ここでは、国のアイデンティティは国際社会での優位性を持つものに代わっていき、それが過度になれば紛争の原因ともなる。そうした面で、どうしていくかが問われている。

△まとめとして；アイデンティティは社会の改造構造毎に各挿画上意層に向けて存在を名良化するための方策であり、そのことで階層の上方向と下方向にて相互に作用しあうところがアイデンティティの役目ともいえる。これは個人レベルでも地域レベルでも同じことであり、国と国際社会との間まで枠を広げた、それこそ交流が実を伴ってはじめて共調社会・共生社会が実現するものと考え。こうした構想の走りが各階層におけるアイデンティティと言えよう。

【6】倫理には国民レベルと国レベルとで乖離あり

倫理については、市民レベルでは公教育や生活の営みを通して育んでおり、また専門家レベルでも高等教育機関

での倫理教育があり、各界において、例えば技術なら技術者倫理、技術倫理として、倫理を構成している。そうした場では、倫理の根幹をなす人間・人間社会の道理が尊厳、相互尊重・相互理解として設定され、人間・人間社会の在り方へと言及されている。

しかしながら、対社会となると、皆で作り上げている社会において倫理はどう展開されているのであろうか。社会構成の骨格や原動力となっている理念・倫理が憲法や関連の法体系となっても、市民や専門家が唱えている倫理と国が唱える倫理とは乖離しているために、社会そのものが根底が揺らぐことすらあると言いたい。

国には世界という広がった社会(国際社会)があり、そこにおける国の役割を基礎置くなら、一段高いいわゆる国としての行動規範があり、そこには倫理ありとしなければならないが、得てしてそんな枠組みと国民レベルでの枠組みの差がかけ離れている。そこをどう繋いで(埋めて)いくかが問題といえる。

要は、対象枠を(世界に)広げると、それに見合う都合のいい理屈が倫理として組み込まれるだけに、国民視点の倫理を堂国まで積み上げていくかが問われている。ここを考えないと、差別や排外といった事象の解決はあり得ないといっても過言ではない。

まとめとして、国レベルでの倫理をいま国民のレベルにて今一度問い直すべきと考える。

[7] 街レベルの倫理を国レベルの倫理と併存させるには、

倫理が集団において、さらに国において、どうあるべきかの議論の必要性があるが、未だ明確なことはされずじまいである。これは、個人レベルから順次グレードアップして国のレベルまで高めると、その骨格には個人レベルの物が影を潜め、グレードアップに呼応して新たに大規模系や国家系として論理が入ってくる。実際には、個人のレベルは個人に対して適用されるとしているものの、国家は全く別の論理にすることにより、その機能を個人の論理の影響を受けることなく働かせている。

だからこそ、国家には個人の顔が見えなくなり、結果として個人の集合としての行為ではなく都市や国家としての行為が確保できるとみることができる。しかも、国はネーション・ステイト(単にアジェンティ)を持ちだして、さらに社会システムの構築を強め(市民に向くことなく)している。その意味では、国が如何にあるべきかはアジェンティを持ち出すよりも、倫理の方が多くの方々の共感を得やすいのではと考え、構想を練ることが可能であろう。これが、個人レベルからの倫理を国の論理・論理とを併存したことになるといえる。要は、大規模系という国の在り方を大規模維持主導ではない方向で在り方の再構築を併存で考えるべきなのであろう。

[8] 平和推進には倫理の面からも

聞いた話。戦後80年のシボがあちこちで賑わっており、

平和問題が議論されている。戦争への準備でなく平和への準備を、平和造りを。そんな話を聞いていて、世の中ではあまり扱われていないことを常に思うことがある。それは「倫理」である。倫理方面からの平和造りも盛り上げて欲しいので、一般市民の立場から筆を執ることにする。

倫理と言えば、「技術界の倫理では健全な社会の発展に寄与」といったことが言われているが、人間中心はもちろんのこと平和については、(私の知る限り技術系では)新建築家技術者集団だけが言及している。他の学会や協会は(私の知る限り)皆無である。ましてや、一般企業では企業防衛としての倫理を設定しているのが実状ではなかろうか。

倫理とは、人間の道理や社会の道理をいうものであるはずなのに、一般にはなかなか広がってはいない。倫理倫理といって脚光を浴びたのは最近(2000年以降)になってからであり、そこでは、技術駆使における偽装や不誠実等の防止に関する抜本的対応として倫理が取り上げられただけに、根本的な対処が未だ不十分といわざるを得ない。とはいえ、これも社会の向上ということももちろんいえる。

ならば、もっと枠を広げて思考を健全化すべきでは。特に国という大規模集団・大規模システムにおける論理は大規模維持・大規模運営のためのものであり、市民を二の次にしているだけに、時には国どうしの紛争や時には国民に背を向けることにもつながっている。だからこそ、分断や排斥・排外ではなくより良い方向づくりの理が本来の倫理であり、そうした市民感覚の倫理の次元からもっと平和に言及すべき。そう感じられる。

しかしながら、我らの生活において、どうしても「今だけ、ここで、自分らだけ」の枠内思考からの脱却が十分にあらずといえる。世の中では、開明的な方のより一層の活躍とともに、我ら含めて開明(変革)に向けての一步がなかなか踏み出せない状況を如何に改善していくか、倫理倫理というご時世なら倫理を基礎に、教育をも含め、生活環境づくりが向上していけば、と思わざるをえない。

まとめてみるなら、倫理教育を進める方に言いたいのは平和造りであり、また、開明的各位によるのますますの運動推進を願うとともに、私(我ら)も足元からの生活から声を上げて微力ながらも發揮したいものである

[9] 平和問題のベースづくりとして

平和問題について、大国の都合の優先見合って、世界は紛争のただなかをよぎなくされている。どうすればいいのか、社会運動の研究や実勢の方々の頑張りもなかなか実を結ばず、それだけに問題解決は至難の業であろうが、なんとしても前進あつての活動であるだけに、津々浦々多事総論的なことも必要かと思う。特にわからないのは、学術が世界の混迷に関与している訳ではないのなら、なんで、と思う次第であるが、社会学や倫理学がも

っと機能発揮するには我ら市民はどうあるべきか、といった視点で市民レベルでの想いやありかたを述べることにする。これで物事が解決するわけではないにしても、全身の人になると考えている。

近代的な国家であれば、国の正統性や運営の合理性が求められ、対外的にはアゲンテイとして自国のみならず周辺国に宣言している。それを可能にするのは、国としての意識であり、その奥には倫理である。倫理とは、人の道や社会の道を問うものであり、特に重要なのは社会における倫理の形成には、多数集団を束ねる論理や規範・文化が影響しているといわれている。国レベルでは、他国からの保全・安全、自国民の生活保障、他国対象含め経済活動推進特に図られねばならず、そこにおいては、他国の捉え方が敵対関係にあることが多い。しかし、今のご時世では、経済活動在は相手国とのウイン・ウインの関係としている。しかしながら、協力ブロックと南北関係とが交錯し、一方の側では開発途上国を経済的に傘下に収めることが平然と行われている。

要は、自国が有利になる理屈が自国優先や優性思想であり、これは排外主義や経済的篡奪をも合理化する思想がバックにある。これをなんとかするのか。

紛争国に目を転ずれば、排外的論理や自国経済優先、などは文明第一主義といった排外・差別は民族主義の下では事故民ファーストで何の違和感なく実施されている。国もそうした主義の下、利権を広げ収益を拡大しているといっても過言ではない。

【10】 街づくりの歴史、最近では街づくりには行政と市民との間にコンサルが入ってきた

△街づくり論

街づくりが世の中を足元からつくり上げるものと考えて、街づくりについてこれまでの経緯と今後にむけて一般論として述べる。理由は、最近の街づくりは、かつての市民レベルの活動から企業化された活動へとシフトしてきており、これを吟味するには、今いとど街づくりのそもそもから展望し直すべきと考えたからである。

△1. 街づくりの経緯

戦前の頃から続いている住民の生活圏・生存権を脅かす諸事象に対し住民運動・市民運動が粘り強さを増し、公害問題の解決に向け、大規模都市開発等の阻止に向け、不十分ながらもそれなりの成果もあげられている。

しかしながら、各種の諸問題解決に向けての行動もちろん必要だが、もっと根本的に人間の生活を如何に積極的に作り上げていくかについて目を向けるべしの気風が1970年頃から急速に高まりを見せてきた。すなわち、1970年代では、公害闘争や大規模愛発反対運動といった問題対応から端を発して住みよい街をどうするかといった街づくりを地域市民で実践すべき気風が育っていったのである。

その後、1980年代では地域協議会WS等参加型となり、

1990年代では街づくり運動多様化としてNPO主導やWS多様化となり、2000年代以降では市民自治の強まりと共に協働型となって、今日に至っている。

このような市民の動きが先行して行政側も対応し、1980年代では自治体では「まちづくり」の係りや班ができ、いわゆる街づくりが行政として制度化されるにいった。とりわけ1990年代では、まちづくり条例や市民参加条例が多くの自治体で制定され、ワークショップも活発に開催されるようになった。そして2000年代以降は、総合計画や福祉計画に市民参加の道が開かれ、協働路線が定着してきた。

△2. 街づくりも企業化

上述したように、行政は自らの施策遂行において市民参加の道を切り開き、市民への各種サービスを街づくりの観点で市民とともに実施することを考えだした。具体的には、行政から直に市民に働きかけることもあれば、街づくりに精をだしているボランティア市民(団体)に補助金支給などの支援システムを考え実働いただくことにもなる。

しかしながら、行政側にも市民側にも状況への対応が困難化してきた。市民側では、今まで街づくりをボランティアでやっていたが、運動の継続と安定が難しく、企業化の声が高まってきた。また行政側では、施策遂行にあたり民間のアイデアとセンスを期待せざるをえないくらいに専門的な観点からの活動に期待したかった。

そうこうして2010年代に入り、行政が市民参加の促進・効率化をもくろんで考えたことは、行政と市民との間に民間(企業)挟むことにより運動をより効果的することであった。すなわち、行政が市民参加をはかるために種々施策を実施している段階で、市民と行政の間にワクッションとしてコンサルを入れるようになってきた

これにとびついたのは、既往の専門集団もあるが、ベンチャー志向の若者であった。彼らは、街づくりのノウハウ中心のコンサルや実践実働加パニを作って、おうしたニーズに対応した。もちろん、何らかの形で行政の支援も受けている。

2020年代に入ると、上記の動きはさらに加速し、これまでの市民参加の路線ではなく、行政と市民とその間にコンサルうした形態が参加う関係として定着してきている。ただし、市民参加がコンサル主導のものでいいのか、行政が何だかんだと言ってもコンサル丸投げではないか、体のいいとりつくりすぎないという意見もある。

△3 地方創生をかかむ

街づくりの枠を超えて地方そのものをも街づくりの観点でつくっていくという動きが加速している。多くの自治体では何らかの形でそうしたコンサルのお世話になっている。これには全国規模のものあれば、今は街の範囲で頑張っているコンサルも郁々は全国を睨んでいる。もちろん大企業のシグナクも国際問題をも含め国レベルというにおよばず自治体のレベルまで食い込んでいるとも聞く。

とにかくそこでは、地域創生もいいが、市民参加のセンスをどう盛り込んでいくのかについては誠にこころもとな

いと今の段階では言える。市民のニーズもビジネスチャンス拡大に役立てるといった思考が今なおまだっている。これらの点を克服していくにはどうすべきか。聞き手見たいものである。

【11】 行政は各種業務をコンサルへ丸投げでなく 行政とコンサルの間に市民を入れること

以前から「行政の各種業務のコンサルへ丸投げ」が問題となつていくところに加えて最近では中央から地方自治の根幹に関わる問題も出てきており、地方行政の存在理由が問われている。これを市民レベルではどう対処していくかが迫られているので、検討することにした。

(1) 行政の各種業務のコンサル丸投げ：

最近では、例えば地域の過疎化を理由に学校統廃合の推進が加速して来たり、かつ PFI 方式導入として諸事業のコンサルへの丸投げが目立っている。(周知のように)PFI 方式とは民間のノウハウや資金力・資金調達能力を活用するシステムのことであるが、実質は行政が民間(多くはコンサル)に丸投げを可能かつ推進するシステムである。こうすることで、最近の地方の財政が実質には縮小傾向にある事、行政職員の定員削減状況をおこなえる事、行政の意思伝達が(市民經由を飛ばしてずっと)効率的である事、民間の高い専門性・資金調達能力を利用できる事、等が可能となつてくる。

確かに PFI 導入は現時代に合わせた方法の一つであり、市民参加については、コンサルが市民の WS 参加で対応と主張しているが、本当にそうなのであるか。そうではない。決定事項には市民は全く参加していない。加圧があるだけに過ぎない。もし言うならば、行政とコンサルの間に市民を入れるべきである。行政もコンサルもそのようなことを考えていないのが問題である。

(2) 中央の地方自治介入の動き：

中央から地方へは、地方自治体の原則を骨抜きにしかかぬ中央からの圧力があり、自治体の人材不足・低レベルを補うためと称して中央が自治体の首根っこをつかむかのような風潮が作り始められようとしている。そもそも、地方において人材やボランティアについて問題を招いたのは中央が原因ではないか。中央対地方の問題として捉えるべきである。自治体側ももっと、考えを持って行動して欲しいものである。

(3) ではどうしていくべきか：

これには地方自治の健全化を図るしかないと考え。行政のコンサル等民間への丸投げや中央からの地方自治への介入は、市民の声が不十分との勝手な見方や中央の居丈高に端を発するといつても過言ではない。となると、市民のパワーアップ、市民が支える自治体のパワーアップが求められ、その意味でも(世論を超えた文化や社意識の総体となる)社会的基礎土壌のづくりが根幹となると考える。そこには、市民参加・主導により地域のネットワークが地域の中でネットワークを核に中央並びに全国へのネットワークとして繋がっていくものと考える。こうした方向で、地域を持って行くことが肝要である。これが、持続可能(サステナブル)と同じ感覚で足元思考(フットカフ)といいたい。足元思考とは、市民レベルで市民の営みの場である街からの筋を通して問題の俯瞰と深掘の観念で行政の施策遂行にも市民としてかかわっていく総体としての考えのことである。これをもって結びとしたい。

【12】 日本における高齢者の生存に関する脆弱な気質を問題に

最近、日本の男性・女性の平均年齢は世界トップクラスとなっている。これは医学の進歩の賜物と言え、喜ばしいことである。その一方で、人間が何処まで尊厳を保って生きればいいのか、という疑問を呈する風潮も強くなってきている。事の起りとして、高齢者医療の経済負担が自治体や国の財政を圧迫しているということ、寝たきり高齢者を抱える社会でいいのか、が根底にある。

しかしながら、そうした高齢者医療問題(以後、高齢者問題)では、尊厳や財政の問題にしているものの問題の基礎にまで言及されることはほとんどないといつても過言ではない。

このため、一般人における高齢者問題においては、一般人の素朴な考えとして流布されているのは、以下のような発言である。ただし()内の文言は編集者が記。

- ・夢も希望も生きがいも全くない高齢者にとっては単に生かされているだけ(一身の始末)
- ・そんな状態になる前に高齢者は(自分の身の始末を)自身及び家族と話し合っ決めておく(一身の始末の合意)
- ・高齢者は家族に迷惑を掛けない(一身の始末を自ら)
- ・日本人だからそれでいい(一同調圧力にもなる)

上記の考えの根本は何か。それは、高齢者本には誰のために生きるのかについて、周りの方々のためということであり、欧米でいう「自分のため」という言葉は決して出てこない。これを国民性と評する方が多いのも実に気にかかる。「自分の事は自分で実践」がなぜこうも軽んじられているのか。二点においてさらにみる。

一つは、高齢者の生きがいにおいては、社会の存在がまるで感じられず、感ずるとすればそれは周辺の人や社会への付度であり、社会の施策に高齢者を元気づけることがまるでないのである。人に迷惑を掛けないという風潮はまさに高齢者の生きがいをくじくものであり、真に高齢者のやりがいを境が支援していることにはまったくなっていない。

二つには、高齢者自身が上記のような社会モードにおいては、完全に思考停止や萎縮を感じざるを得ないことである。夢も希望も生きがいも失うとは、まさにそのことであり、自己責任と言わんばかりの感がする。これまた社会全体でそうしたことにならないよ支援ががるべきと考える。

三つには、日本人の取るべき道といった合理화가気になる。付度思考はもともと、(自説だが極論すれば)日本の経済的貧困と、他民族侵入に介した自我の形成が必要なかったことによると考える。だからこそ、そうした風潮を打開すべく、各種の問題で市民運動が高揚している。

結局、高齢者の社会的環境を如何に充実させていくのか、高齢者自身が自ら生きることが肝要であり、まわりから生きること諦めるような(強いるような)風潮は社会における同調圧力としてやはり断つべきと考える。高齢者が満足いく生涯を貫くという視点をもっと充実させて、自ら生存を放棄するに近いような風潮はなくしていく必要があると考える。

▲▲***付録***

以上、高齢者問題に対して核心を纏めると、誰のために生きるのか。日本では自分自身ではないようだ。しかも、そこにはやりがいや夢や希望が無くなった時点で生存を放棄するという現実があるといわんばかりである。言ってみれば現代版姥捨て爺捨てがまかり通りつつある。なぜ、高齢者が夢ややりがいを失うのか、そこは社会環境の脆弱さに起因しているだけであり、批判は社会に向かず自分及びその周辺に向けるという日本の悪いところと見て取れる。

ちなみに、二点補足する。一つは、日本の医療が自治体や国の財政を悪化させているとして、医療財政健全化の動きが上記の高齢者生存にかなり影響を与えているのではと思われる。なんと自分よりも他者・他機関に付度しなければならぬのか。二つには、日本だけが寝たきり老人が多いので、日本独自の対応が必要という論がある。これは日本以外での多くの国では高齢者の死亡率が日本より高く、寝たきりになる方が結果的に少ないだけの事である。あたかも、日本の特殊事情だから、高齢者生存そのものを好ましくないという見方は慎むべきである。

【13】 人は誰のための生きるのか

人の生存は自身の実践(行動)と社会の支援とからなると考え

ている。だが、日本では社会の支援を明確に言う人は少なく、家族を含め周りに方々との調和を気にすることが高齢になると特に多くなっている。本来、人の生については、生きたいというパワーが自身に内在するとともに、社会が生きる環境や気運を高めており、その意味でも人は自身と社会とにより生存をより可能にしている。

しかしながら、日本の場合、社会からの高齢者生存への働きかけ(今の福祉行政をより超えた精神ヘルムにおいて)が十分ではなく、また、個人ヘルムでも自らの生存を自ら閉じよう(人に迷惑かけられない)とする傾向もある。これは、自身でも生存が難しく、社会でも生存がしにくくなってきている現れである。以下に欧州の場合と日本の場合を比較し、日本の今後について考える。(欧州についてはリチャードさんの話を基に構成、十分でないかもしれない)

欧州では尊厳を自ら保ちながら最大限生きるという姿勢がある(と聞く)のに対して、日本は社会に付度し、周辺の人(家族)に付度し、自らの生を諦めるかのような思考と行動がある。

我友人によれば、その違いは宗教にあるのではという。確かに欧州の場合、一神教で思うに神のご加護の基に生があるので、生ある人間は最後の最後まで尊厳がある。これに対し日本の場合、輪廻思想(仏教)や八百万神の存在がご加護ではなく次がある(輪廻)とか何処にも神が居るとして個人を精神的に律することが宗教的主目的にならず(推論にかなり無理有だが、無我の境地といった捉え方)、だから日本では、何かにつけて付度が日常的なのではなからうか。

ちょっと長くなったが、日本の場合、自分のために生きるという発想はなく(少なく)、自分も人のために生きているといわんばかりであるので、その意味で自主性が欠落しているといった見方ができるようである。

[14] SDGs 運動にいまなお盛り上がり

SDGs 運動はそれなりに効果を上げていっているとはいえ、今なおピンチに立たされていると考える。今何が問題となっているのか。△まずは4点を検討したい。

(1)SDGsの17項目のうち必要項目をつなげる視点があまりない。いくつも関連しあう項目についてどう活動を進めていくのか。特に企業は割合、目的を絞っているのが気にかかる。

(2)企業については、国の指導を受けて生産に反映し、エンドユーザーの市民が企業活動の枠内でサービスを享受することになる。そのようなことで市民側は十分なのか。

(3)SDGs は今のこの状態の抜本的改善を目的とした世界的運動と考える。しかし、我々の長期的展望ではSDGs という節目をも含むものであり、SDGs があるから長期展望不要ではないはずである。ここが世の中では忘れられがちであり、本来の学術がそうした視点にならないことも大変な危惧である。SDGs の後継運動をどうするのかを考える上でも、俯瞰的な展望のない世界にどう展望を描くつもりであろうか。はなはだ心もとない限りである。

(4)市民の素朴な感情は大いに尊重すべきところに、世の中を誘導するようなフェイクが世の中を煽りながら勢力を民衆の声としていることに大きな危惧を感じる次第である。例えば、地球温暖化、気象学者が温暖化の進行を分析しているのも書かぬあず、某国大統領も含め温暖化はフェイクと言ってはばからない。

△学術やジャーナリズムの在り方

もともと学術は、物証を重ねて(体系的に熟考により論理をやって実証することにより)はじめて世の中に公表することになっている。これであると、事象から公表までかなりの時間を要するので、フェイク派はそれをいいことにやりたい放題となる。しかも問題なのは、フェイク推進派により利益者集団が御用学者を囲い。市民をそうしたムードに乗せることである。だからこそ、ジャーナリズムが即効的に対処すべきなのである。こうしたことが

今日的に発生したのであれうから、早急に対処を学術や市民とともに考えていくべきといえる。

[15] SDGs 運動の背後をも念頭に置く

SDGs を論ずる際に、各目標に邁進するのは当然にしても、その背景の熟成をどう図っていくのか根底にある大問題と考えるべきと思っている。もちろん、SDGs のすべての目標が束になって我々の「地球社会づくり」にあたっているともいえるが、その「づくり」をもっと先行させるとすると、今の地球環境づくりの根幹となるシステムの「ド」が大きな障害になることもある。例えば、SNS によるフェイク拡散問題、個人中心からの社旗の拡大をねらった「ド」が却って地球環境と結果的に一線を画す問題、自分だけ・ここだけ・今だけ思考の問題、がある。ここでは「づくり」の問題として検討したい。

△A. 背後の問題

(1) SNS フェイク拡散問題：

地 SNS によるフェイクの拡散への対処。球温暖化もフェイクといったことが一般市民も結構受け入れていて、ここを発信源としてさらに拡散が続いている。詳しくは述べないが、フェイクを見つけることは市民の間では相当困難であるので、真実をひろげていくしかないとなり、ジャーナリズムがもっと機能すべきところである。もちろん是非は学術が担当としても、ジャーナリズムとの連携はいつでもない。

(2) 「ド」については、もともとは個人の健康から端を発し、個人のやりがい・生きがいの範疇を含め、これを社会にも広げかつ持続可能とすることで、「ド」であるという持続する幸せ状態が人類の到達点というようになってきた。ここでは社会性が入ることにより地球全体のヘルムというので、平和や人痕などの世界問題も入れるべきという意見とそういう目標はあっても各自を中心として社会における充実を図るべきとの意見があり、今の「ド」ではそのこのところを確定せずとしている。

(3) 今だけ・ここだけ・自分だけ(金だけ)について。自分中心で自分の周りの時間と空間が関心事であり、その枠を超えるところは関知せず(実際は感知できずだが)で自分注視の世界を築くことである。ここまですると、地球環境危機などはどうでもいいたいようになってくる。しかもそこには、自分中心の経済があり、金の流動があるとしている。

△B. 改善に向け

SDGs への取り組み姿勢がより充実するのはその背後の社会的基礎土壌の熟成に向けてどうしていくかがいままに問われている。そう考えて、背後の問題の共通するところを探れば、当然のこと、今あること、今見えていること、今かわっていること、が共通して実は狭いということに尽きる。その意味でも枠外思考と行動が肝要であるといえる。今の時代には、まず自分と他人の枠組みを認識し、利他を心掛けることが利自に繋がるとしてこれをさらに広げ、社会を階層的に出会っても地球まで広げるといってことに尽きる。しかしながら、広げるといっても言うは易しであるので、何がポイント化を提案すれば、社会を階層構造的に捉えるしかないと考え。事実、自分中心から始まって単にを認め、生活圏内の社会を認めるならば、そこから階層アップしていけばいいといえる。この原動力の醸成として足元思考・行動としての街づくりがあるといえる。

[16] 街づくりから上位系へのロジックの積み上げ

第I編2章の[10][11]にはほぼ同じ。

[17] 社会におけるアクション系とバックグラウンド系の二系構成とアクション系の階層構造について

世の中の思考・行動や社会システムにおいては、昔から哲学

の世界では、社会の階層構成や社会実存系に対する背後系の構成(存在有無構成)といった二つの理念が打ち立てられている。前者は存在論強調の西洋哲学系であり、後者は東洋哲学系である。現在は二大潮流のもとで新たな社会論・哲学論を組み立てるべきとの考えが走り出している。以下に説明する。

(1) 存在有無構成；存在の有と無の共存は魅力的

これについては、一つの大空間において、大きな海上(無の世界)にしっかりと大きな大陸(存在の世界)があるというイメージである。西洋哲学では存在論の世界が主であり、無の世界はあり得ないとしていた。これに対し、昔から東洋哲学の世界では無の世界がしっかりと認識されている。最近、そうした構図について、西洋哲学が着目している。

実はこうした構図は我らの日常や仕事の上でも形を変えて作られている。まず、社会に着目してみると、行為の系(アクション系)とそれを支える背景の系(バックグラウンド系)がある。また、人間系でいえば人間の英知の系とそれを支える背景の系とがある。

にもかかわらず、意外にも無の存在よりも有の存在の身に固着しがちなのが今の社会である。これは有の存在で事を効率的に構成したいがためであり、無の世界からの有への展望という思考をも不要としている。

(2) 階層構成；各階層間の不連続性が気になる

人間中心の世界において、個人が集団を成して生活を営んでいる。その集団は種々の機能を持って、要素形態が種々につくられ稼働している。こうした状況を学術的に表現すると、個人 vs 社会、個人 vs 集団、基本集団 vs 機能集団、等と社会学では概念化されている。一方、人間 vs 社会システムの観点から行くと、システムの効率運営化のために階層構成がそなわっている。これは、個人→家庭→街→地域→大地域(市町村や県)→国→グローバル経済圏→国際社会、のような構成になっている。

こうした階層構成では構成の各層において必要なロジックが兼ね備わっているが、上位階層と下位階層との間には不思議と乖離を伴ういわば鉛直方向の分断的な不連続状態になっている。これもまた鉛直方向の効率化を図りすぎた結果ともいえる。卑近には、街づくりと都市づくりは本来連続すべきところが全く繋がっていないのとおりである。

(3) 我らはどうする

街づくりが社会づくりの源として推進してくると、どうしても上記の二点が気になってくる。私が思うには、第一に、無があればこそ有であり、無からの有への展望に大いに期待できよう。第二に、階層構成といえども、足元から組み上がる階層には、足元のロジックがそのままあるいは形を変えて従位の階層とは繋がるはず(上位との相互関連)である。こうしたことから、二つのアプローチを使用することが諸問題に対する今日的な解決を目指していると考えている。

著者自身も、そう考えて研究姿勢を磨いている。著者は、まず第一に、人間の英知とその周りの土壌があるというイメージで社会的基礎土壌を主張した。第二に、人間の英知がつくるシステムには階層構造の様相があり、各種の行為は各層内のものと共に、階層間をつなぐものもありとして、階層間を縦横斜できる融通性を検討してきた。その結果行きついたのが、足元からの思考・行動の考えである。街づくりは、そうした視点で実施していくべきと思っている。

3. おわりに

第II編では、第I編対象の富山を超えて国(日本国)や国際社会までも含め広域的社会(単に社会)として、社会の階層構成による各階層間の相互関連について検討した。社会における諸問題の解決には、階層構造を前提とした視点で、足元ステージ、中間ステージ、上位ステージといったように対象を設定し、足元となる街づくりからの思考・行動による上位への積み上げについて、上位の推進側ロジックとの併存がまずは妥当であることを明らかにした。

追記として著者の研究姿勢を述べる。基本は(第I編にみた)俯瞰的・哲学的等のスタンスにある。よくいわれているように、近代の根幹をなす専門分化・分業分化の弊害への対処として、連携・複合・融合が叫ばれ、種々の取り組みが遂行されている。これについて著者は、人間の英知とその周りの土壌があるというイメージで社会的基礎土壌を主張した。また、人間の英知がつくるシステムには階層構造の様相があり、各種の行為は各層内のものと共に、階層間をつなぐものもありとして、階層間を縦横斜できる融通性を検討できた。

【Ⅲ】 あとがき

著者は、これまで種々提言を必要に応じて世に単発的に出してきた。これらをまとめなおして、「地域と社会に向けての各種提言」とした次第である。この後は、皆さんの声を聞きながら、再度まとめ直したいと考えている。

以上を持って、地域への提言および社会への提言とする。

末筆ながら、本稿を作成するにあたり関係各位からお世話をいただきました。ここに記して謝意を表します。